

フレーベル教育學の根本問題

—いざや吾等を吾等が兒童に生きしめよ(フレーベル)—

日本教育學會會長
廣島大學教授
文學博士

長 田 新

一 幼兒の發見

幼きものの魂を醇化し育成することが人間形成の上に最も大きな意味を有つことに就いて、真に正しい理解を有つていた者はフレーベルである。單に正しい理解だけではない、つてその理解の上に立つて七十一年の長い生涯を「幼き者のために生き」抜いたのが彼である。そういう偉大な教育者の生涯と思想とに就いて知るところは今日全く救済的の意味があるではあるまいか。というのは古代においては「起始は如何なる仕事にあつても最も必要な部分であるが、取りわけ若く軟かい事物の場合においてそうである。何故かと言えばそれ

は性格が形作られ、思うままの印象がいつも容易く与えられる時だから」と、あの『理想國』の中に言つてるプラトンがあつたにも拘わらず、また近世初頭には「人間は幼き時代を外にしては真には形成されるべくもない。人間が人間にまで形成されるために、神は人間に教育以外の何事にも適さない若い年を恵み与えてある」と、あの『大教授學』の中に言つてるコメニユースがあつたにも拘わらず、幼きものの魂を育くむことの有つ高い正しい意義に就いては、今日の教師も親もその知るところが余りにも乏しくまた余りにも浅い。その証拠には幼児は教育の対象ではなくて、養育という言葉の低い動物的な意味の仕事の対象としてさえ今尙お一般に考えられてるではないか。併し思えば事柄は嘗て道元禪師が「學道用心

集」の中で「発心正しからざれば万行空しく施す」と言つたほどの意味があるだけではなくて、華嚴經に言うように「初発心時便成正覚」とさえも言い得るほどの深い意味があるではあるまいか。而も幼児の教育がこのように深い意味を有つことは、一方ことの困難をも必然に伴う謂でもあつて、さてこそ龍樹をして涅槃心経の中に「発心畢竟二無別、如是一心先心難」と嘆ぜしめたではないだらうか。而もフレーベルの全生涯と全思想との有つ意義は、この困難な仕事に対して世の教育者の取るべき態度を、彼れのような浪漫主義の哲人ならでは出来ないような独自の仕方ですぐに説き教えたところにある。少なくとも彼が詩の世界から聖の世界に幼きものを導き行こうとした『母の歌と愛撫の歌』の企図するところの如きは、浪漫主義者ならでは説き教えることの出来ない天地を切り拓いたものではあるまいか。恐らく人類教育の広野において尙お処女地として残されていて、而も三千年の教育的努力が歟を入れた総ての既耕地よりも、とさえ言いたいほど広くもあれば多量でもある教育の野は幼児教育ではあるまいか。「幼児の発見者」でもあれば世界における幼稚園の最初の創始者でもあるフレーベルの百年祭に當つて改めて吾等と彼に学ばうとするのもこのゆえである。

二 敬 の 教 育

フリードリヒ・フレーベルがチューリンゲンの森の中の一寒村オーベルワイスバハに呱呱の声を挙げたのは一千七百八十二年春附な四月二十一日のことであるが、この第十八世紀という世紀は「哲学の世紀」とも呼ばれ、特にその後半から世紀末にかけてはヨーロッパの全文化が濃厚な哲学の鬱閉気に包まれた時代で、危篤の病床を訪れた友に向つて「余の健康なんか話題にし給うな。僕達の間にはただ永遠なものがあるだけではないか」と叫んだ人さえ出たような時代である。恐らく人文価値がこの時代ほど鋭く批判され、豊かに生産され、深く鑑賞された時代は他に見附けることが出来まい。時代のこうした一般的精神に培われて、人間教化の世界にも偉大な教育思想家が次から次へと輩出して「哲学の世紀」は纏てまた「教育学の世紀」でもあつた。この「教育学の世紀」に輩出した教育思想家のうちでは人は先ず指をルソーとペスタロッチーとフレーベルとに屈せずばなるまい。ルソーを以て人間教化の久遠な道を示した予言者とするなら、独自の性格を以てこの予言を体験したものはペスタロッチーであり、ルソーの予言したもの、ペスタロッチーの体験したものを、哲学的思索の深味に持ち来して新たな試練を加え、それ

を基礎として幼児教育の新世界を開拓したのが今吾々の問題としてゐるフレーベルである。

フレーベルの時代は周知の如くドイツ理想主義哲学の最高潮期だつた。彼れの誕生はカントが『純粹理性批判』を公けにした一千七百八十一年の翌年だつた。カントはフィヒテ、シェリング、ヘーゲルという三大使徒を生んだが、フレーベルは一面精神と自然とを實在の両極と見るシェリングの「同一哲学」に心酔しつつ、他一面絶対を神的なものと見るヘーゲルの思想を攝取した。主著『人間教育』の中でフレーベルはこうした立場を明らかにした。彼に言わせると、万物のうちには永劫の理法が働いていて、それが万物を支配している。万物を支配するこの理法は万物に普遍的に働きかける生命のある自覚的な統一力に基礎を有つてゐる。この統一力が神で、その神から万物は生じて来た。だから万物はただ神において自己の存在を見出す外はない。而も万物のうちには働く神的なものが万物の本質である。こうした自己の本質を表すことが万物の使命でもあれば万物の仕事でもある。このようにしてフレーベルは吾々人間の特有な使命乃至畢生の仕事を「自己の本質、自己の神性、従つて神とそして自己の本分、自己の職分そのものを十分に意識し、生き生きと認識し、明らかに洞察し、そして自己決定と自由とを以て自らの生活の中にこれを實現し活動させ明瞭にするにある」とした。総じてフレ

ーベルにおける自然觀・象徵主義さては事物に対する美的見解はこれをシェリングに負い、倫理的的人生觀即ち人格・意志・義務等の思想はこれをフィヒテに承けたとも言ふことが出来る。フィヒテが彼れの親友の一人であつたということ、一千八百十七年に迎へた二十年一日の如くフレーベルの畢生の事業に内助の功を積んだ最初の夫人ウイヘルミーネがフィヒテの薰陶を受けた才媛であつたということ、更にフレーベル自身の告白にも明らかなるように、フィヒテの著作はルソ、ペスタロッチ、パーゼド、等の著作と相並んで特に彼の愛読書の一つであつたといふことなどから推しても、フレーベルにおけるフィヒテの影響は大きかつたらう。けれども人間の使命をそのあらゆる勤勞乃至作業を通じて自己のうちに秘められた神性を顕現すると見たフレーベルの立場は、自然を以て絶対または神理性的が無限に多様な個物を創造する過程と見たヘーゲルの立場とも相通する。このようにしてフレーベルの著作を読む者は、誰しも恐らくカントから發展して来たドイツロマンティックの哲学、特にシェリングやフィヒテやヘーゲルの思想が到るところに浸透してゐるのに驚かされるだらう。教育史上におけるフレーベルの功績は、第十八世紀の後半から第十九世紀の初頭にかけて發展したドイツロマンティックの思潮をなみなみと汲んで来て、人類教育の曠野に灌漑した点にある。

惟うに人間教育の仕事は個々特殊の方法以上の何ものかに依つて靈化されなくてはならない。勿論方法なしには方法以上のものを表わすに由もないが、併し方法は常に方法以上のものに依つてのみ生命を付与される。それが教師その人の抱懐する世界観に基礎を有つ教育の理念である。従つて教育者は自己のうちに必ず理念の深淵を湛えていなくてはならない。うちに理念の深淵を湛えていない教師や教授や訓練は工場における齒車の廻轉にも異ならない。而も方法が単なる方法に留まつて機械化し形式化するところに教授や訓練の病弊がある。だから方法は方法以上のものに依つて靈化されなくてはならない。ところがフレーベルの教育学は吾々をして常に具体的な一々の教育作用の意味を深く反省させ、遂に宇宙の究極原理に復帰させる。彼れの強味はここにある。崇高な世界観はフレーベルを通じて吾々教育者の一々の仕事に生命と魂とを付与せずにはおかない。このようにして彼れの主著『人間教育』は吾々教育者の聖書である。恐らく人は彼れの『人間教育』を読んで児童の前に立つ時、思はず襟を正し、敬虔の念のひしひしと胸に迫るを禁じ得ないだろう。

周知の如く人間の教育は愛の仕事であつて、同時にまた敬の仕事でなくてはならない。而もペスタロッチが「愛の教育者」であるなら、フレーベルは「敬の教育者」であると言つていい。愛と敬とは教育活動の成立する二個の人格的な基礎

原理である。ところが人類の教育史上において愛はペスタロッチに依つて代表され、敬はフレーベルに依つて代表される。勿論ペスタロッチに敬の原理がなく、フレーベルに愛の原理がないなど人は言うべきではなくて、愛と敬とは互いに關聯して此等二人の思想の基礎になつてはいるが、併しそれにも拘わらずペスタロッチ教育学の基調が愛であり、フレーベル教育学の基調が敬であるということは拒み得ない。今右二原理のうち特に敬の原理が有つ重要な意義は、愛の原理がその主観性のゆえに吾々各自にあつて如何に精進しても遂にその境地に到ることが困難であるのに、敬の原理は対象の真相を究め知る努力の結果そこに到達することが出来る。周知の如く愛はそれの有つ主観性のゆえに外から強いことは出来ない。愛せと言われて愛せるものでもなければ、愛そうと思つて愛せるものでもない。だから教育愛の如きは如何に世に有り難き原理であつても、人が例えばペスタロッチにその好き例を見るような天来の人格者ならでは如何ともなし難い場合が少なくない。そう考えて愛の原理は決して普遍的なものではあり得ない。ところが敬の原理はこれとは違つて、吾々の努力の結果としても屢々招采される。敬も固よりそれが感情という主観的な一個の意識ではあるが、併し實在の真相を究め知るところに展けて来るといふ意味で、言い換えれば知性を基礎として生起するといふ意味で、

愛に比して一層普遍的の性質がある。勿論真相を知つても尙お敬し得ない場合は世に決して少なくない。併し真相を確かめ、その決して粗末にすべからざる所以を解する時、それに対する敬の意識の生起することは少なくない。農夫が却つて一粒の米も粗末にしないのは、彼は吾々と違つて米の眞価を知つてゐるからである。然らばフレーベルの教育学が敬の原理に終始してゐるとは如何なる意味であるか。

フレーベルに依れば万物の中には永劫の理法が秘められ、働らき、そして支配してゐる。万物を支配するこの理法は永遠の統一者としての神を基礎としてゐる。万物は神的なもの即ち神から生まれて来て、そして神的なもの即ち神に依つて制約されてゐる。神の中に万物の唯一の基礎がある。一切のうちには神的なもの即ち神が常住し、働らき、そして支配してゐる。一切は神的なもの即ち神の中に、而も神に依つて存在してゐる。万物はその中にただ神的なものが働らげばこそ存在する。万物の中に働らく神的なもの、それが万物の本質である。而も万物の使命は、フレーベルに言わせるとその本質即ち神性若しくは神を外界に表わすことである。知的な理性的な生類としての人間の特殊の使命は、自己の本質、自己の神性従つてまた神を生き生きと認識し、自由にして自己の生活の中は表わすにある。吾々各自は人間の形を取つて現われて来た神なものとして認められまた育くまれなくてはならない。

吾々各自は神の愛の保証として、神の親近者として、神の恩寵として、神の賜物として、認められなくてはならない。だから世の両親は神の擁護者としてその子に対する責任を感じ、責任を認めなくてはならない。独り両親だけではなくて世の教育者も自己を神の賜物の後見人として、保護者として乃至は養育者として考えなくてはならない。そう考へて人間の教育とは結局神を実現することであり、教育の目的は聖なる生活の実現にある。人間の内なる神性即ち人間の本質は教育に依つて人間の中に実現され、發展され、そして自覺の域に進められなくてはならない。

以上は教育活動の本質並びに教育精神に就いてのフレーベルの立場であるが、人はそこに教育における敬の原理が如何に強調されてゐるかを看取するに苦しくないだろう。而も吾々は前にも述べたように、神人ペスタロッチの道を歩むはよし企て及び難しとするも、尙お児童において神性を見、教育活動を以てその神性の顯現としたフレーベルの道を歩むことは出来るだろう。というのは前にも述べたように愛はそれの主観性のゆゑに外から強いることは出来ないとしても、敬は事柄の眞意真相の把握という知的基礎がこれを喚起すること出来る。今これを児童に就いて見れば、吾々は児童の何であるかの正しい深い理解から児童の敬すべく重んずべきを知つて、教育のことに當ることが出来る。というのは一木一草

にも永遠者の姿を看取し得る吾々は、神の似姿である人間の子において愈々永遠者の姿を看取して敬虔の念に燃えるに難くない。而も真にこの間の消息を明らかにしようとする者は誰よりも先ずフレーベルに行くべきではなからうか。コンコードの哲人エマースも「教育の秘訣は児童を敬するにあり」と教えている。而もフレーベルの全教育学こそこの敬の精神に終始している。

三 創造的自己活動

教育作用における児童の位置を高く評価する傾向はアメリカのプロジェクト・メソッドやコープ・カリキュラムも俟つまでもなく第十八世紀の時代思潮の一つであり、従つてルソーやペスタロッチーやフレーベルにおいて吾々はこの傾向の最も典型的な場合を見附けるが、その最も徹底したものは吾々がフレーベルだつた。言うまでもなく児童は彼れの教育学の主体であつて、「児童のうちに未来の種子がすべて秘められて」とは有名な彼れのモットーだつた。而もその種子を要するに神性と解し、無限なものとして解し、絶対と解した彼は、児童を重んずるといふより寧ろ児童を畏れ敬した。従つて児童研究の動機もフレーベルにはフレーベル独自の意味があつた。というのは普通の世の教師は児童のためになすべきこと

を学ぼうとして、詳しく言えば児童は如何なる教授を受くべきか、児童は何時また如何に教授を受くべきかを学ぼうとして児童を研究する。ところがフレーベルの児童研究の動機は、飽くまでも児童自身の自己發展を助けるためだつた。児童における精神的道徳的覺醒の過程を明らかにし、児童が自らその環境に親しみ社会關係に入るその仕方を明らかにして、總ての教授訓練を児童の自己發展の自然の過程と調和させるために彼は児童を研究した。だから世の教師は自分が教授するために児童を研究し、フレーベルは児童に学習させるために児童を研究した。教授法の研究は教師を主体とする旧教育学の遺物であり、学習法の研究は児童を主体とする新教育学の中心課題でなくてはならない。この新教育学の中心課題を明らかにしたのが近世教育史上におけるフレーベルの功績である。教育が児童のための仕事であることは言うまでもない。フレーベルは教育を単に児童のための仕事としたのではなくて、実に児童に依つて、また児童を通じて成し遂げられる仕事とした。このように考えると、フレーベルの教育思想は現代乃至最近における教育改革運動の導火線だつたと同時に、第十九世紀の中葉以後独裁的の支配力を有つたヘルバルトの教育思想と著しくその趣を異にしたとも言ひ得よう。というのはヘルバルトは教授に重きを置いたから自然教師の活動に重きを置き、フレーベルは自己活動に重きを置き

たから自然児童に重きを置いた。ヘルバルトは教授に依つて道徳的品性を築き上げようとし、フレーベルは児童の活動力を發揮させることに依つて自ら性格を創造させようとした。

ヘルバルトは教授と教師とを重んじたからまた觀念の整理に忙しく、フレーベルは自己活動と児童とを重んじたから觀念の整理よりは感情や意志を重んじた。これカントを棄てて觀念力学説に走つたヘルバルトと、カント及びカントに發する独逸ロマンティックの使徒だつたフレーベルとの間に必然生ずべき間隔ではなからうか。

教育上児童の自己活動を重んずる傾向は、先にも述べたように第十八世紀の哲学、わけてもライブニッツの单子論などに培われて、その後の教育思想を一般的に支配したが、この傾向はフレーベルに到つて徹底した観がある。言うまでもなく自己活動とは自己の動機に基づく、従つて自己の興味と自己の能力とに支持される活動の謂である。而も精神生活の發展がこのように内面的に基礎付けられる時教育の目的が達成される。こうした活動はもともと人間個有の天性に基づいてから、それはまた自由でもある。各自が外部の力ではなくて自己の天性の中に感得される力に従うから自由である。而もその活動は天性に基づく法則に従つて起つて来るから自由であつて、而も教育活動指導の意味を有つてゐる。このようにしてフレーベルにあつては教授訓練の一切の過程は児童の興

味から来るとも言われよう。興味とはもと自己發見の喜びである。真善美の可能性としての各自の天性が文化活動乃至教育生活において自己を發見するところに興味が起つて来る。だからフレーベルにあつては児童の教育は凡そ児童の未來の生活に對する準備などではなくて、教育即生活となつて来る。抽象された遠い後年の大人の生活を抽象し縮寫して来て、それを児童に強いるのが教育ではなくて、児童は飽くまでも自然な且つまた眞実な生活を満喫すべきで、そうすることに依つて児童は立派な大人になる。而もここにはフレーベル教育学の根本原理の一つと言つていい彼の連続律が予想される。というのは彼に従えば人間の發展が或る一点から連続的に進行するものとして認められることは人間の全教育に取つて極めて重要である。だから人間の發達に嚴密な人爲的の境界や区劃を設けて、生命ある連続發展を阻害することがあつては由々しい大事である。フレーベルは言う。「幼年・少年・青年の各時期の要求が、彼に依つて忠実に補充されることに依つて初めて人間は大人になる。……世の両親達は幼児が早くも少年または青年として自らを示し始むべきことを要求するだけではなくて、更に特に少年が少くとも自己を大人として示し、總てその行動において大人と同じかるべく、従つて少年期と青年期とを飛躍することを要求する。」このことを要求する世の親達は、彼等自身も常にただ彼等が彼等の

本性に従い、一定の關係に依つて、種々の段階を生活し抜くことに依つて、またその限りに於いて役立つ両親にもなれば、また役立つ人間にもなつたということを見逃し、また打ち忘れたものである。そして両親が生活し抜いて初めて役立つ人間になつたその種々の段階をば、子供は両親の要求に従つて飛躍しなくてはならない。「幼年・少年即ち人間は一般に各々の段階において、この段階の要求するものであるより外には何等他の努力を必要としない。斯くする時各々の段階は健康な蕾から次から次へと新芽のように躍り出で、そして次から次へと表われて来る各段階において、同じ努力に依つて再び彼は此等の段階の要求するものを完成するようになるだろう。何故かと言えば各々の先き立つ段階における完全な人間發展のみが、よく続いて来る後の各段階の完全な十分な發展を実現し生み出すからである。」このようにしてフレibelは生命の連続發展観の上に立つて古い準備主義の教育を打破し、教育即生活論を提唱した。生命の連続發展観や準備主義の打破や教育即生活論は決してアメリカなどの所産ではなくて、人はその最も徹底したものをフレibelの教育説に見ることが出来る。

一千八百二十五年カイルハウにフレibelの学園を訪れた一学務官の手記にはこうある。「精神の自己發展はこの教育の第一原理である。生徒の精神を一個の強固な箱と考へ、社

會に通用する大小諸種の貨幣を出来るだけ多く年少の間に蓄積しようとするが如きはこの教育の目的ではない。その教育は徐々として連続的に、漸進的に、且つまた内面的に發展し、言い換えれば人間精神の本質中に見出される關係に従つて發展し、その間何等の技巧を用うることなく、簡より繁に、具体より抽象に向つて確乎たる進歩を営む。そのよく兒童の性質に適い兒童の要求に合してゐることは、兒童が学習と遊戯との間に何等の逕庭をも感じてゐないことでも明らかだ。」

このようにして兒童の自己活動はフレibel教育学の中心原理であつて、自己活動に対する彼れの信念とその大胆な適用とは彼れの教育学の最も顯著な特徴だつた。勿論自己活動の原理を教育に導き入れた者は彼以前決して少なくない。けれどもフレibelほどこの原理を大胆に且つまた徹底的に主張もすれば実行もしたものはない。恐らく彼れの前にも後にも彼ほど深くこの原理を解した者はないだろう。或る人も言つたように若し世の教育者に依つてフレibelのこの自己活動の原理が十分理解されれば、現代の教育には更に大きな革命が起らなくてはならない。

フレibelが師として仰いだベスタロッチーもまた兒童の自己活動を重んじた。けれどもフレibelに至つてこの原理は一層徹底したかの觀がある。ベスタロッチー教育学の合言葉は周知の如く直観で、「直観は總ての認識の絶対の基礎」

である。彼は教育の一切をその直観に依つて基礎附けようとした。フレイベル及びその生徒は直観に依る教育は児童の自己活動を確保すると言つてペスタロッチを声援した。而もペスタロッチは知識の基礎として現実的な事物を使用して確實な観念を児童に与えようとし、フレイベルは寧ろ感覚や情緒を陶冶し、特に正しい自己活動に訴えて児童の性格を涵養しようとした。ペスタロッチの生徒は言語と手とに依つて物を観察し模倣したのに、フレイベルの生徒は寧ろ自ら観察し自ら創造した。ペスタロッチの生徒は再生的であり、フレイベルの生徒は創造的だつた。ペスタロッチの生徒は發表するように訓練され、フレイベルの生徒は自己發表するように訓練された。ペスタロッチは児童の生産活動に満足し、フレイベルは生産的な自己活動を要求した。ペスタロッチの理想は「余は児童に善きことをしなくてはならない」ということであり、フレイベルの理想は「余は児童を通じて善きことを發展させなくてはならない」ということだつた。このようにフレイベルにおいて児童の自己活動はその最高潮に達した。嘗てアメリカで強調されたプロジェクト・メソッドもダルトン案もドイツの試行学校の試みも、また最近のアメリカの新教育もフレイベルの教育法に比しては尙お甚しく微温的の感なきを得ない。

尙おここに附記すべきはフレイベルの教育学と彼が創始の

幼稚園とが世界の何れの國よりも最もよくアメリカに輸入され發展されたことである。恐らくそれはビュリータニズムに基礎を有つアメリカ精神と言つていいあのフロンティアスピリット(開拓精神)と相通するところがあつたからではあるまいか。というのは前にも述べたようにフレイベル教育学の根本精神は児童の創造的の自己活動を重んずるところにある。そしてそれは彼が創始のあの恩物にも見られる。普通世間に行われてゐる遊具を児童の創造的の自己活動力を滅殺する藪蔭の毒蛇である嘗つた彼は、児童の創造的な自己活動を自由自在に伸ばすために恩物を作り出した。而もこうした創造的の自己活動こそ、広漠無辺の大自然に取組んで自己の自由な自己活動に依つて自己の運命と地上における人類の文化とを開拓して行こうとするフロンティア・スピリットではあるまいか。言い換えるとフレイベルの教育精神とアメリカの國民精神とは符節を合する如く一致したのである。勿論デューイやキルパトリックの著作の中にはフレイベルの教育思想に対する批評もあるが、併しそれにも拘らず児童の自由と創造的の自己活動と更らには勤勞作業に依る生産活動を重んずる彼等の主張がそのままフレイベル精神であることは説明するまでもない。

四 労働と教育

教育史上におけるフレーベルの功績の一つは労働教育に対する彼の独自の主張である。労働は古来種々の立場から主張された。周知の如く労働教育に対するルソーの主張は彼がエミールに向つて「私はお前が茶碗に画をかく画家になるより、寧ろ道路に砂を撒く土工になつて欲しい」と言つた彼自身言葉でも解かるように、社会的経済的の立場だつた。ペスタロッチーはまた直観主義の教授論から出発して実物研究乃至手工等を奨励したが、これは五官の活動を通じて知覚を完全なものにしようとする認識論の立場であつた。フレーベルはルソーにおいてのように社会的経済的でもなければ、また必ずしもペスタロッチーにおいてのように知覚を完全なものにしようとするものでもなくて、内的自我を外部に表現することそのことの有つ深い宗教的・哲學的の意味を認めた。「人間教育」の中で彼は言つてゐる。「万物の使命と職分とはその本質即ち神性を、従つて神性そのものを發展し、神を外界に、そして現実を通じて明らかにし顯現することである。知的な理性的なものとしての人間の特殊の使命・特別の職分は、自己の本質、自己の神性従つて神と自己の本分・自己の職分そのものを十分に意識し、明らかに洞察し、そして自

己決定と自由とを以て自己の生活の中にこれを実現し活動させ明瞭にするにある。」だから勤労や作業は彼にあつては自己の本質・自己の神性を表現し發展する過程に外ならない。斯くて人が生きるとは勤労や作業において自己を実現することである。勤労や作業は彼にあつては人がその眞の意味において生きる道である。ところがフレーベルに言わせると「人は今日勤労や作業に就いて虚妄な外面的な考えを持つてゐる。併しそこには深い宗教的の意味がなくてはならない。というのは人間がその肖像である神は不斷に創造しまた働き続ける。」「神の精神はまだ姿の定まらなかつた渾沌界に浮かび出て、これを動かした。そして石と植物と動物と人間とは形態と構造と生存と生命とを得た。神は彼自らの肖像である人間を創造した。神の似姿として神は人間を創造した。だから人間は神のように創造し、また働かなくてはならない。彼れの精神即ち人間の精神は形態も構造もない渾沌界に浮かび出て構造と形態、それ自らの本質と生命とを有つてゐるものを生ずるやうに働かなくてはならない。これが吾々が眞実の意味でまたその特徴を認めて呼ぶところの労働と勤労、仕事と創造との高い意味であり、深い価値であり、大きな目的である。吾々が仕事に依つて内的なものを外部に表現し、精神に形態を与え、思想に構造を与え、見えないものに見えるものを与え、永遠なもの即ち精神的生命に外部的な有限なそして現実の姿

を与えるという明瞭な思想なり、臆気な観念なり、乃至は直接的な生き生きとした感情なりを伴う勤勉と労働、仕事と行動とに依つて吾々は真に神のようになるのである。」而も思えば「天国はまた児童のものである。何故かと言えば大人の街氣と狂氣とが児童を妨げさえしなければ、児童は無邪氣な信頼を以て吾が心のうちに働らく構成衝動と活動衝動とに嬉々として自ら帰依するからである。」フレーベルに依れば、「人はただその形骸である吾が肉体を維持するために労働するのではなくて、自己のうちに秘められてる精神即ち神性が外部的の形態を取り、斯くして彼れが自己自身の精神的な神の本質及び神の本質を認識するために創造するのである。これに依つて彼に授かる麵麩や住居や衣服は剰余でもあれば意味のない附加物でもある。だからイエスも言つてゐる。先ず第一に神の国を求めよ。」余が神の意志を行うことが余の糧である。「だから人間の眼には労働するとも見えない野の百合は、一切の彼れの榮華におけるソロモンよりも一層美しく神から着飾られてゐる。何故かと言えば百合は葉と花とを開いてゐるのではないか。而も総ての現れのうちに神を示し、神を現はし、神の本質を明らかにしてゐるのではないか。」空飛ぶ鳥は人間の眼には時くとも見えず耕すとも見えないが、併し彼等はその唄う時、また巢う時、その各々の働きを通じて總ての様々な行動を通じて、神が彼等のうちに秘めてくれた

精神、その生命を表現するではないか。さればこそ神は彼等を養ひそして支えるのである。」

「晩鐘」「落穂拾い」さては「種蒔く人」の作者としての彼のミレーは、汝の額づく大地の間に詩と宗教とを見出せと教えたが、フレーベルは労働と作業とのうちに人間と精神と神とを見出せと教えた。現代社会の疾患は人間と労働、精神と物質との悲惨な分離と解体とである。だからパウロ・ナトルプはあの『社会的理想主義』の中で「総ての理想主義は社会的でなくてはならないし、総ての社会における人間と労働、てはならない」と説いて、現代の社会における人間と労働、精神と物質との痛ましい分離を統一しようとした。而もそのような教えを一百余年の昔早くも提唱したのが吾がフレーベルだつた。シェリングの同一哲学に基礎をおいた彼れの教育思想は人間と労働、精神と物質との統一を人間の教育に求めた。周知の如く現代教育の欠陥は理想主義に立脚する者は生きた現実の社会生活を忘れて超越的の態度に墮し、反対に現実の社会生活乃至職業活動に重きを置くとする者は理想を失つて功利と実益とに墮する点にある。フレーベルは楕円の二個の中心点にも比すべきこの両極を同一哲学の立場に立つて内面的に統一した。周知の如く産業革命以後の近代市民社会における生産機構においては労働は商品と化し、従つて労働者は人格を喪失した。そこに世界史の危機があり、人類の

終焉さえ予感される。そこでこの喪失せる労働者の人格を奪回することに依つて世界史の危機を克服し、人類の終焉を防止することこそは今日焦眉の急を告げる問題である。彼のナトルプはこの問題を解決しようとして『社会的理想主義』を著わし「社会主義は理想的にならねばならないし、理想主義は社会的にならねばならない」と叫んだ。吾がフレーベルは前にも述べたように既に第十九世紀の初頭においてドイツロマンティックの哲学乃至は自己の得意とする汎神論並びにエリングの同一哲学を基礎として、労働に宗教的の意味と価値とを附与することに依つて、喪失せる労働者の人格を奪回し、以て世界史の危機を未然に防止しようとした。こうした点にもこの予言者に学ぶべきものがあるではなかるうか。言うまでもなく吾等が今日フレーベル百年祭を祝うことは、一百年前に世を去つた彼に就いて昔嚳をするということであつてはならない。人類文化のために、人類教育のために、幼児の教育のために戦つたこの殉教の士の生涯を回想し、その説き教えたところを深く味い、以て明日の文化と教育とを新たに作る企図でなくてはならない。歴史を新たに作る上に彼を生かすことこそ「創造的自己活動」の福音を説いた彼を祭る謂ではあるまいか。

(一千九百五十一年四月五日)

参考文献

- 一、倉橋惣三著フレーベル
- 一、小川正行著フレーベルの生涯とその思想
- 一、莊司雅子著フレーベルの教育學
- 一、莊司雅子著恩物手引草
- 一、長田新著フレーベルに還れ
- 一、長田新譯フレーベル自傳(岩波文庫)